

神殿としての図書館 —社寺から展開する日本独自の図書館建築—

1170050 楠本 建

指導教員：渡辺 菊眞

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

0. はじめに

私は本が好きだ。本一冊一冊の持つ重みや、匂い、日焼けの跡、そして書かれている文字たち。一枚ずつページをめくる度に新たな出会いと発見があり、読み終わった後には満足感と達成感を得られる。そんな本たちを保管し、貸し出す場所として図書館は作られてきた。図書館は私たちに本を通してまだ見ぬたくさんの物語や知識と邂逅する機会を与えてくれる。

1. 背景

西洋のある時期に建てられたいくつかの図書館には素晴らしいものが存在する。ここでは



トリニティ・カレッジ 写1 トリニティ・カレッジ
図書館を紹介したい。 図書館内観*2

(写1)から分かるよう

に高いアーチの弧を描く天井の下でずっと奥まで本が続いていく光景は荘厳さを感じるとともに、教会建築のような神聖さすら感じられた。この空間は人に本と出会う感動と神秘性を与えてくれる。

しかしながら現代の日本の図書館建築はというと、機能性や利便性ばかりを強調した結果、床と天井に囲まれた平板な空間に書架を配置しただけのものが多く、空間としての神秘性が薄いと感じた。そこで、日本でも本との出会いが感動的で神秘性のある図書館があれば、本と人の関係はもっと素晴らしいものになるのではないかと考えた。

2. 目的

本設計の目的は「本を置くための神秘的な器としての図書館を創造する」ことである。しかしながら、教会建築は西洋の概念に則ったものであり、日本に

は日本固有の概念があるため、教会建築を参考にすることは難しい。そこで日本での神秘性をもつ空間として社寺建築を参考にし、社寺的空間を図書館に導入することで日本独自の図書館を計画する。

3. 西洋の教会と図書館

教会建築の空間構成がどのように図書館化されているのかを示す。

3-1 空間構成

教会建築にバシリカ式というものがある。信仰の核は主廊の最奥部に設けられ、その両側に側廊が設けられる。

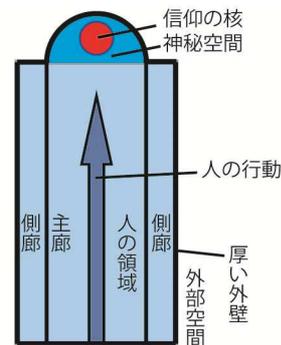


図1 バシリカ式教会の空間構成

3-2 図書館化

先に述べたトリニティ・カレッジ図書館も中央に主廊が設けられ、側廊にあたる場所に書架を設置している。教会空間の主たる特質を保持しながらも、主廊よりヒエラルキーの落ちる側廊に書架を置いている。

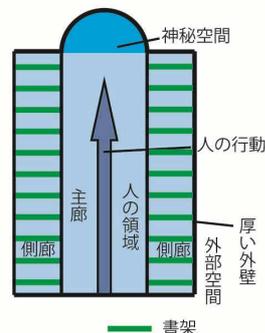


図2 バシリカ式教会の図書館化

4. 日本の社寺と空間

4-1 日本の宗教的空間

現在の神社には、主たる祭神とは別に、「自然」という信仰の核が存在するのが常で、全国には神霊の宿った山々や滝、そしてイワクラが数多くあり、崇拜の対象とされてきた。自然への感謝や畏敬の体現であり、神の住まう神域や、彼岸と此岸の境、禁足地などを示している。また、周辺環境に呼応する配置をとることが多く、遙か彼方にある山や岩を信仰の核と定め遥拝することもある。

4-2 神社の空間構成

神社の空間構成を図式化したものである。(図3) 拝殿から距離を離して本殿の正面を見ることが多く、本殿の中には依り代である鏡や石が祭られている。本殿のさらに奥に信仰の核があり、遥拝する。ただし、拝殿ですら神主などしか入ることができず、人が体験する内部空間は乏しい。

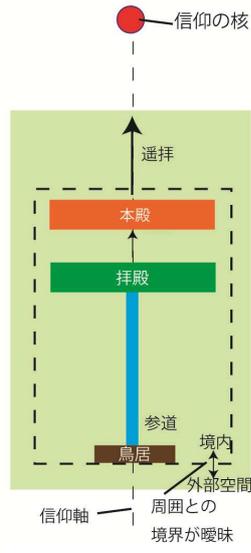


図3 神社の空間構成

4-3 空間の豊穡化

図書館は「本を入れるための神秘的な器」であり、内部空間を豊穡化させることが必要である。日本で神社と並んで宗教施設としての役割を担う寺院建築は中に人が入ることが想定されており、内部空間に富んでいる。そこで寺院建築の空間構成を先に述べた神社の空間構成に組み込むことで空間を豊穡化することを考えた。それにあたり、寺院の空間構成を分類して説明する。ただし、寺院建築と神社建築は相互に影響を及ぼしあってきたため、下記に述べる寺院の空間構成を用いている神社も存在することを付記しておく。

1) 絵画的空間

絵画的空間は人の領域から神の占有空間を礼拝する構成で、人の位置から見える部分に正面性が発生する。その結果、奥行きが画面のように浅い一枚絵のようになる。絵画的空間が建築の外部にあるものと内部に現れるものがある。

外部の例としては平等院鳳凰堂が挙げられ、写真のように人の領域から建物の強調された正面を見る構成である。池を介して見ることで幻影のような印象を与える。



写2 平等院鳳凰堂*3



図4 平等院鳳凰堂空間構成図

内部の例としては三十三間堂が挙げられ、建物内の千体の千手観音を絵画的に見せるために、階段状に配置し、それが奥まで果てしなく続いている様を

見せている。



写3 三十三間堂*4



図5 三十三間堂空間構成図

2) “空”の内部空間

“空”の内部空間は人の領域である外陣からかみさまの居る内陣のガランとした空間を拝む構成である。例として比叡山延暦寺の根本中堂が挙げられ、外陣から暗がりの内陣の中にある厨子を拝む。



写4 根本中堂*5

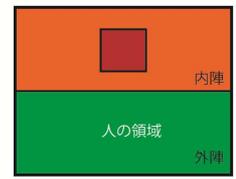


図6 根本中堂 空間構成図

3) 行動的空間

屈折と旋回を用い、見通せない空間の中を鑑賞者が巡り歩くことによって建築を体感させるものを行動的空間という。例えば羅漢寺の羅漢堂が挙げられ、空間構成図から分かるように、内部空間は屈折や旋回を多用している。見通せない角を曲がる度に次の光景が現れては消える。こういった経験を繰り返しながら、最後まで体験しないと全体を把握することができない空間である。

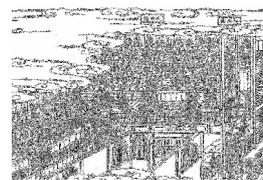


図7 羅漢堂内観*6

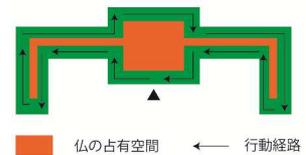


図8 羅漢堂空間構成図

以上の三つが寺院の空間構成として挙げられ、寺院の空間体験の豊かさにつながっている。

5. 敷地

本設計の計画敷地は高知県香美市土佐山田町の物部川による河岸段丘地形である。住宅街のなかに両側に桜並木が植わっている道が現れる。その道を250mほど進むと道の真ん中に木が一本植わっていて道が唐突に終わってしまう。(写5) 訝しながら木に近づくと木の根本から段丘が始まり、田畑や民家、

山、空が目の前いっぱい広がる雄大な景色を目の当たりにする。(写6)物部川が長い時間をかけて作り出したこの地形と風景は人智がおよび得ない自然の力を体現したものに感じ、この風景を神の宿る崇拝の対象、すなわち信仰の核とした。また、段丘線の他の場所は段丘の上の領域と段丘の下の領域が道でつながれているために自由に行き来可能であるが、選定敷地は国道からの道が段丘線により打ち切られているという特徴がある。これにより下の領域に降りることができず、先に述べたような道の行き止まりから風景を眺めるといった体験が生まれる。風景の持つ自然の力強さと離れた場所から遠くを遙拝するという感覚を覚えた。



図9 対象敷地位置図*7



写5 道の行き止まり



写6 段丘上からの風景

6. 設計

6-1 設計指針

- 1) 社寺的空間の設計
- 2) 社寺的空間と敷地の有機的連関
- 3) 社寺的空間の図書館化

6-2 設計の方法

1) 社寺的空間の設計

神社の空間構成を空間骨格とし、寺院建築の空間豊饒化技法を重ね合わせる。拝殿から本殿を絵画的に参拝し、その後行動的空間で紆余曲折しながら本

殿の裏側を参拝する。その途中で“空”の内部空間により本殿のさらに奥への広がりを感じさせ、信仰の核心を遙拝する。

2) 社寺的空間と敷地の有機的連関

社寺的空間の構成を計画敷地に適用させる。住宅街の桜並木のある道を参道とし、道の行き止まりから風景を神の宿る信仰の核として遙

拝する。段丘線から下に広がる神の宿る風景を幅広く遙拝するために長さ130mの本殿を段丘に沿って配置し、拝殿から絵画的に見せる。下の田畑が広がる風景は神域であり、そこに建築を作ることはいできない。そのため、本殿裏側の“空”の内部空間は段丘上に片持ち梁として設け段丘上から張り出す。また、“空”の内部空間を段丘線に沿っていくつも配置し、行動的空間でそれをひとつずつ巡っていく構成とすることで段丘線に沿って幅広く風景を遙拝することができる。

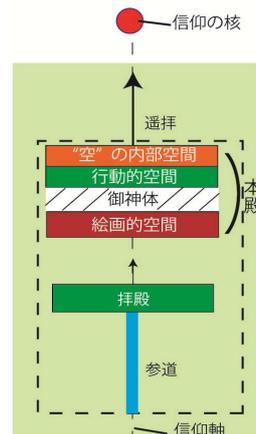


図10 空間豊饒化図

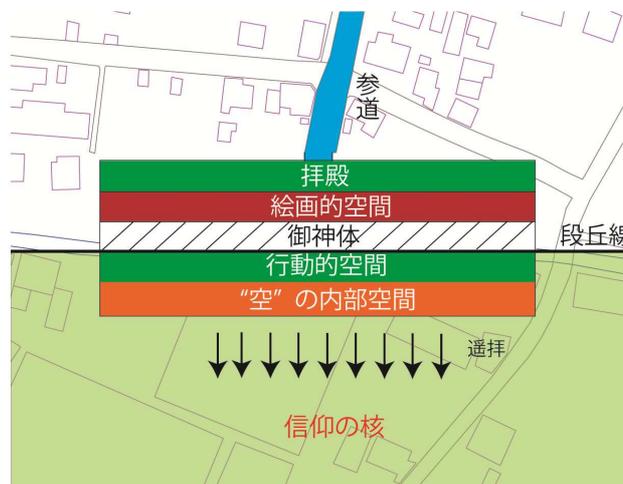


図11 敷地との有機的連関

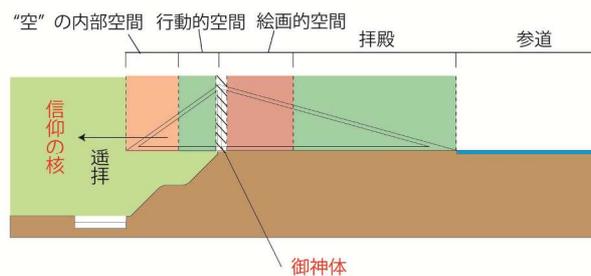


図12 断面図

3) 社寺的空間の図書館化

社寺的空間を図書館化するうえで「本」は御神体として扱う。蔵書数は開架4万冊、閉架1万冊の合計5万冊とする。小口の間では本を収めている書架を信仰対象として配置し、閲覧スペースから本を絵画的に見せる。小口の間からは本の裏側（小口側）を鑑賞者に見せ、逆に開架閲覧からは本の背表紙側が見えるようにする。小口の間床には表面を磨いた黒御影石を用いて、小口が写るようにし空間の広がりをもつ。開架閲覧は行動的空間を用いて、見通しのきかない中を屈折しながら縫うように歩くことで書架が次々とあらわれる空間とした。遥拝の間は“空”の内部空間を用いて、光の線だけがあるガラとした空間とし、あえて信仰の核を見せないようにすることによって実際に見たときよりも信仰の核への意識が強まるようにした。



図13 図書館化

7. 空間体験

図書館は参道から見ると空に向かって屋根がずっと遠くまで伸びているように見える。また、それが段丘に沿って横方向にも延長されている。道を進むと屋根の下に消えていく階段に出会う。入っていくと徐々に長い書架が見え始め、登り切ったところで目の前に長大な書架に5万冊の本の小口が並ぶ光景に出会う。(写7) 書架が幻影のように黒御影石の床に映っている様は本が知識の刻まれた紙の集積であることを知らしめし、見るものに畏敬の念を与える。その後開架閲覧に入ると本の背表紙が見え、(写8) 本を選ぶことができる。トラスにより見通せないその奥にはさらに本の空間があり、そのまた奥にもそれは続き、奥へ奥へと進んでいく。書架の反対側は

ガラとした空間に光の帯だけが差し込んでいる空間がある。(写9) それを見た人は光が入ってくる天井の向こうに何があるのかが気になり、さらに奥の見えない光景への想像を膨らませることができる。

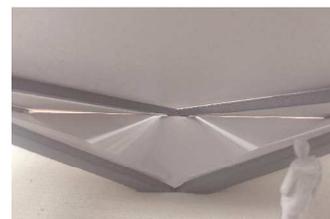
130m 歩くとまた小口の間に戻ってきて、再度、小口が果てしなく並んでいる様を目にする。初めに見た時はただただ紙の集積があるということしか分からない。しかし、二回目に見るときは開架閲覧で背表紙側を少しづつ見るという経験を経ているため、紙の集積の一つ一つが本であることを分かったうえで拝殿から眺めることができ、より本としての神秘性を強く感じられる。



写7 小口の間からの光



写8 行動的空間



写9 “空”の内部空間

8. まとめ

神社の空間構成を空間骨格とし、寺院建築の空間構成を用いることで豊かな社寺的空間を設計した。それを敷地と有機的に組み合わせ、図書館化することによって日本独自の神殿としての図書館を創造した。この図書館に収められる本は神秘的なものとして感じられるようになり、人は本の素晴らしさ、かけがえのなさを改めて知ることになるだろう。

9. 引用参考文献

- *1 井上充夫、日本建築の空間、鹿島出版会
- *2 笑うメディアクレイジー
<https://curazy.com/archives/40964> (取得日 2016.10.23)
- *3 フリー画像・写真素材集 4.0
<http://free-photos.gatag.net> (取得日 2017.1.28)
- *4 仏像を見に行こう
http://blog.livedoor.jp/buddha_ojisan/archives/1371364.html (取得日 2017.2.4)
- *5 グッドアーム株式会社
<http://right-web.jp/4-goodarm/category6/category8/entry33.htm> (取得日 2017.2.15)
- *6 とおくの細道 東京散歩
<http://blog.livedoor.jp/henky/archives/13858574.html> (取得日 2017.2.4)
- *7 Google マップ
<https://www.google.co.jp/maps/@33.6040486,133.6913562,17.04z> (取得日 2016.11.17)